
金は増えも減りもしない箱

山羊ノ宮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

金は増えも減りもしない箱

【Nコード】

N7054I

【作者名】

山羊ノ宮

【あらすじ】

「大変だ！コーエン！」

「な、何だ？一体？」

あるところにコーエンと言う名の裕福な男がいた。

コーエンは以前友人から金の増える箱と金の減る箱を譲り受けたのだが、またその友人からある物を見て欲しいと頼まれたのだ。

「大変だ！コーエン！」

「な、何だ？一体？」

あるところにコーエンと言う名の裕福な男がいた。

コーエンは以前友人から金の増える箱と金の減る箱を譲り受けたのだが、またその友人からある物を見て欲しいと頼まれたのだ。それは宝石箱のような小さい箱だった。

「宝石入れたら、小人が出てきた」

「そうか、それは良かったな。会いたかったんだろ、小人に」

以前コーエンが友人からもらった箱からは小人が出てきて、友人はそれを羨ましがっていたのだ。

「うん。それはそうなんだが・・・」

「それでその小さな箱は何がどうなる箱なんだ。出てきた小人に聞いたんだろ？」

「ああ、聞いた。どうやらこの箱はただの箱らしい。中に何かを入れても別段何も変わらないらしい。俺に分かったことはそれだけで、あとは小人の説明が難しすぎてよく分からなかった」

コーエンは過去の小人達の説明を思い出し、同意する。

「コーエン、それでもものは相談なんだが・・・買わないか、この箱？」

「何でそうなる。そんな役に立たないものを何で俺が買わなきゃいけないんだ」

「だってお前箱マニアだろ？」

「違うわ。と言うか俺にたかるなって言っただろ」

「ああ、分かっている。だから買ってくれ」

「お前なあ・・・」

結局コーエンはその何の役にも立たない箱を友人から買った。

それから三百年後。

「怖いよ、コーエン」

「大丈夫。ルーシーは僕がちゃんと守るから。何か手はあるはずだ。このまま死んでたまるか」

世界は今まさに滅びようとしていた。

そして、少年と少女は世界の終りであがいていた。

コーエンは実家の納屋で何か役に立つ物を探っていた。

まさにそれは藁をもつかむと言うものであったのだが。

「コーエンさんじゃありませんか？」

不意にコーエンを呼ぶ声がした。

そこには箱があり、その側には小人がいた。

驚きながらも二人はもしかしたらこれは何かの救いかもしれないと小人に向かって話しかける。

「確かに僕の名前はコーエンだけれど、君は一体？小人さんは僕のこと知っているの？」

「ん？ああ、確かに違いますね。コーエンさんの子孫の方ですね。

今登録を更新しますので、網膜パターンと声紋を登録っと、あと指紋も取っておきますか？セキュリティ上その方が安全ではありませんが・・・」

「お話の途中ごめんなさい、小人さん。一つ聞きたいのだけれど、いいかしら？」

ルーシーが小人の話を止め、質問する。

「はい、私に答えられることでしたら」

「今隕石が落ちてきて世界が滅びそうなの。どうやったら助かるか知らない？」

「さあ、私には分かりかねますが、今コーエンさんの金貨の貯蓄が七千五百二十不可思議三千五十六那由他九百八十一阿僧祇四千・・・二十五枚となっておりますので、そのお金で何とかすると言っのはいかがでしょうか？」

二人は聞いたことも無い莫大な数字に啞然とする。

「もしかしてその後ろの箱の中にそれだけの金貨が入っているの？」
「はい。ですので、開けるとときには注意してください。溢れてきま
すので」

「・・・」

「もちろん小出しにしたい場合は私に言ってくださればお引き出し
いたしますのでご安心を」

小人の言葉にルーシーは晴れやかな顔になるが、コーエンはいまい
ちパツとしないままであった。

「すごい、コーエンってお金持だったんだね」

「確かに僕がお金持ちだなんて信じられないな。けれど、もう少し
早くそのことを知っていれば手も打てたのに。もうお金なんていく
らあったて役に立たないよ」

「そうですか。お役に立てず申し訳ありません」

二人が落ち込んでいた時、また声がかかる。

「あつ、コーエンさんじゃないですか。お久しぶりです」

そこにも箱があり、その側に小人が立っていた。

「君は一体？」

「ん？ああ、そうですね。コーエンさんが今生きているはず無い
ですよ。すみません。早とちりしてしまいました。遺伝子配列が
似ていらっしやるので多分子孫の方ですね。それにしても大変です
よね。予測通りとはいえ本当に隕石が落ちてくるなんて」

「もしかして小人さんはあの突然現れた隕石について何か知ってい
るの？」

「え、あ、あ、はい。昔コーエンさんが小銭を入れるのが面倒だと
いうことで、小人銀行からわざわざばかりの金額を自動振り込みされ
るようにしてくださいましたから」

「じゃあ、教えて。どうしたら助かるか」

「うーん。多分どうやってもこの世界はあと九十時間後には滅んで
しまうと思います。そもそもあの突然現れたと思われている隕石に
ついてですが、実際には高次元下には既に存在していたものなんで

す。例えばこう地面に人型を書きますよね。そして、この指をこの人型の前に置くと、この人型にしてみれば突然現れたと思うでしょう。ですが、この指は元から存在していた。つまり・・・」

「ごたくはいいよ。結局何も手は無いつてことだろ。何の役にも立たないじゃないか」

「す、すみません・・・世代を超えて役立たず扱いされてしまった・・・」

しよぼくれた小人は並々ならぬ哀愁を漂わせるが、コーエンは無視して何かほかに手は無いかと探し始める。

そして、また箱と小人を見つけた。

「よう、コーエンっちじゃねえか。何しけた面してんだ。元気出さねえか」

それは小さな宝石箱のような箱だ。

「ねえ、小人さん。この世界がいま滅びようとしているの。何か助かる方法はないかしら？」

「さあ、俺っちは知らねえなあ。俺っちの箱はただ物を位相空間に置いておくことができるだけだから。位相空間とか言っても良く分かんねえよな。パラレルワールドとか言った方がいいのか。いや、それとも可能性の世界と言った方がいいのか。まあ、説明してもわかんねえよな」

「可能性の世界？」

「もしかしてその可能性の中に世界が滅ばない世界とかあるの？」

「分かんねえけど、探せばあるんじゃないか」

「コーエン。助かるかもしれない！」

「駄目だよ、ルーシー。こんな小さな箱にどうやって入るんだい？もつと大きな箱じゃないと」

「できるぜ。箱を大きく」

「本当か!？」

「おうよ。けど俺っちもそれなりの腕のいい職人でい。それなりの金は取るぜ」

「ああ、構わないよ。金なら有る」

「そうか。じゃあ早速俺つちの口座に金を振り込んでくれ。この箱に金を入れても意味無いからな。気をつけるよ」

それから小人は紙を取り出し、何やら文字ととてつもない桁の数字を書いた。

コーエンはすぐに一人目の小人の元に行き、紙を渡す。

「お振り込みですね。かしこまりました・・・指定された金額を指定された口座に送金いたしました。またの御利用お待ちしております」

それからコーエン達は小さな宝石箱のような箱からうじゃうじゃ出てきた小人達が箱を改造している様を見ていた。

「ねえ、コーエン。まだ時間あるし、他の人達も助けられないかしら？」

「駄目だよ、ルーシー。外の混乱している様子見ただろ。多分パニックになって僕達すら脱出できなくなるかもしれない」

「そっか」

うなだれるルーシーに二番目に話しかけた小人がルーシーに話しかける。

「も、もしよろしければ私がお二人が行った後にここに訪れた方がいらしたら、そちらの箱に誘導いたしましょうか？」

「本当?!」

「はい。私も役立たずのまままで終わるのは納得いかないっていうか。でもでもこれは自己満足の様な気が。しかし・・・」

「ううん。ありがとう。小人さん」

ルーシーは小人の頬にキスして、それからコーエンと共に立ち上がる。

そして、改造を終えた箱に向かって、歩みだす。

「達者でな。お二人さん」

「くれぐれもお気をつけて」

「またの御利用・・・できませんね」

箱の中に二人の姿は消えた。

「ルーシー！ルーシー！」

「・・・コーエン？」

「良かった。気がついたみたいだね」

「ここは一体？」

ここはアフリカ大陸の中部、サバンナ。

地平線が見える褐色の草原の中に二人はいた。

「どこだって構わないさ。僕は何があっても君を守る。必ず」

「うん」

二人は寄り添い支え合いながら、始まりの地に立っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7054i/>

金は増えも減りもしない箱

2011年10月9日17時57分発行